北から南から

「命の矢印」プロジェクト
～要支援者を含む地域との合同避難訓練と「防災の日常化」の取組～

三重県立北星高等学校 教諭　坂田 広峰

1 はじめに

本校は平成18年に定時制と通信制高校が統合し発足しました。三重県北部に光り輝く星のような高校になってほしいという願いのもと、定時制・通信制の拠点校として様々な生徒が学んでいます。安全・安心な環境で生徒自身が自分の時間割を作成するなど「自分ならではの学び」を支援する学校として、令和５年５月現在、126名の職員のもと、定時制528人、通信制1,080名が学びます。

2 コロナ禍の防災訓練の工夫

コロナ禍の令和３年度、災害時に復旧の早い高規格道路であるバイパス道路付近の高台公園を避難先に設定し、避難経路を確認する「イメージ動画」を作成、オンライン視聴することで、コロナ禍でも効果的な防災学習を実施しました。

令和４年度は、防災学習をとおして10年間連携する富田地区自主防災隊と合同避難訓練を実施しました。高齢化が進む地元地域の中で、高校生が率先避難者として地域住民も巻き込んで避難できるようになる取組を目指してきました。

3 要支援者を含む地域住民との合同訓練による「共助」意識の高まり

これまでの学校と地域連携の集大成として、令和５年度、定時制全校生徒と富田地区住民との合同避難訓練を実施し、高齢者や要支援者役の地域住民を高校生がリヤカーや車椅子で避難場所まで運ぶなどの本格的な合同避難訓練が実現しました。

自主防災隊長からは、「この地区は高齢者が多く、地域の高齢者や介護が必要な住民にとって、高校生の存在があることは大きい」と言われ、高齢者をリヤカーで運んだ高校生は「この人の命を本当に守りたいと思った」と感想を述べました。事後アンケートでは、訓練に参加した生徒の81％が

リアカーに乗せて要支援者を運ぶ高校生

訓練を経験し「この人の命を守りたいと思った」

高台に高校生（手前）と地域住民（後方）が結集

「訓練に参加し防災意識が高まり満足した」と回答し、生徒の「共助」の意識が向上しました。

4 「命の矢印」と「防災の日常化」

この合同訓練を機会に、訓練時のみに止まらず、訓練後もその意識を継続させ、本県の目指す「防災の日常化」のために、津波災害時に逃げるべき高台方向を意識する「命の矢印」シールを学校周辺住民に各戸配布する取組を展開しました。

ボランティア部生徒と自治会長、防災隊長とが①「命の矢印」②ハザードマップ③備蓄品の３点セットを持って学校周辺を訪問しました。

訓練後に住民に配布した「命の矢印」シール

5 取組成果の３つのポイント

取組成果の３つのポイントは、①10年以上にわたる学校と地域との連携、②コロナ禍で工夫した防災訓練イメージ動画、③コロナ後の要支援者を意識した合同避難訓練、訓練時のみにとどまらず、「防災の日常化」のための「命の矢印」の取組の３つとなります。

今回の私共の取組は学校の防災教育担当と地元四日市市富田地区連合自主防災隊隊長が中心となった地域の10年以上にわたる連携が基盤にあります。防災隊長は学校労務員として勤務しており、日常的に担当教員と話ができる関係性でした。地域連携の鍵であり、共助の鍵である、まさに「顔の見える関係性」ができていたことが取組の継続的な発展につながったものと考えております。

6 おわりに

来るべき、南海トラフ巨大地震の際には、これまで以上に「地域の総力を結集した地域防災体制の強化」が求められます。学校と地元自治会・自主防災組織が、その一翼を担う「共助」の要として、多くの命を救い支えることができるように備え、災害に強い安全なまちづくりを進めてまいりたいという覚悟です。